

# OKEN

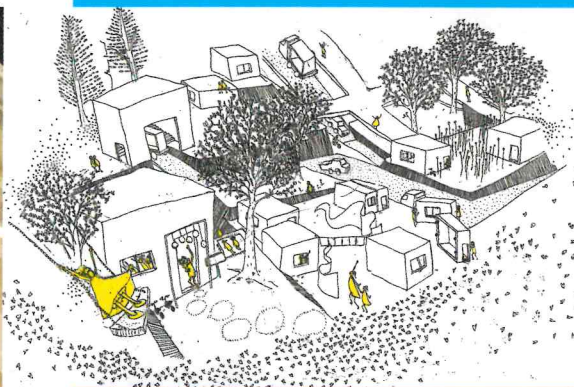
日本大学桜門建築会  
<http://www.okenkai.jp/>

# 桜建会報

2014-July No.100



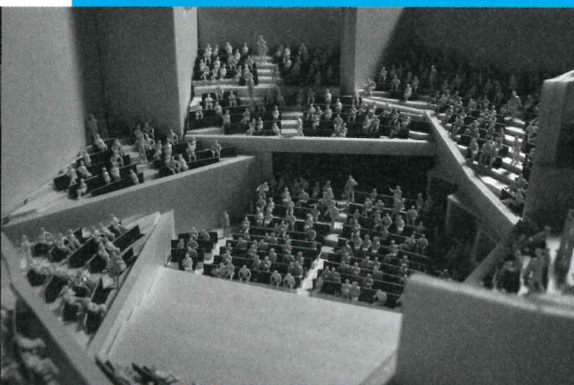
「のりしろ大学横丁」遠田拓也



「在り触れる美術館」小笠舞穂



「PILLAR CHURCH」木村肇



「聴衆の誕生」小林拓也



「受け継がれる石」齋藤範明

## contents

特集◎世代を超える桜建人 100号記念親子DIALOGUE——2

- ① 麻生直木 × 麻生知芳子 × 麻生健太郎
- ② 増田光一 × 増田光弘
- ③ 佐藤義信 × 佐藤明生

2013年度斎藤賞・加藤賞・桜建賞受賞作品の紹介——11

桜建会青年部発足——21

事務局だより——22

学部ニュース——23

# 世代を超える桜建人

昨年、本会も90周年を迎え、多くの同門生を生み出しているが、その長い歴史の中では、親子で日大卒業生となっている人たちも少なくない。今回の特集では、同じ日大建築に学んだ親子3組に登場してもらい、世代を超えた対話をさせていただいた。親に感情移入するか、子に感情移入するかはさておき、時代によって変化したこと、時代を経ても変化しないことなど、親子ならではの話題が飛び出した。なぜ親と同じ大学を子は選んだのか、なぜ子に同じ大学を勧めたのか、そんな視点からあらためて建築の魅力、日大の役割に迫ってみた。(佐藤慎也/広報委員会委員長)

## 息子で日大建築は3代目。大事なものはものより人

麻生直木(理工建築83年卒)×麻生知芳子(理工建築83年卒)×麻生健太郎(理工建築2年生)

聞き手/岡田章、大川三雄、佐藤慎也(理工学部建築学科)

親



ASOU Naoki  
1959年福岡県生まれ。83年理工学部建築学科卒業、同年竹中工務店入社。現在は東京本店設計部構造部門構造8グループ長

親



ASOU Chikako  
1960年埼玉県生まれ。83年理工学部建築学科卒業、同年西武建設入社。87年松江田建築設計事務所に入社し、現在に至る

子



ASOU Kentaro  
1994年東京都生まれ。2013年日本大学理工学部建築学科入学。サークル活動は美術研究会他

### 斎藤公男先生に惹かれ 構造研究会で出会って

岡田●ふたりは1983(昭58)年の卒業だよ。そのころ私は竹中工務店で空気膜の開発に着手していて、大小のドームの実験をやっていた。その実験に斎藤公男研究室の学生に手伝いに来てもらっていた。

知芳子●その小規模ドームの実験が私の卒論「エアサポータード・ストラクチャー」です。アルバイトで竹中の実験棟へも出入りしていました。

岡田●今の竹中工務店の本社ビルの近くに機材センターという実験棟があって、そこで、25メートル角の模型をつくったんだ。会社から数億円の研究費をもらってね。ドームの実験では1枚

45kgのパネルを積んだり降ろしたりする力仕事だから、アルバイトの学生さんに手伝ってもらった。

直木●いい時代でしたよね。

大川●岡田先生にとっては、印象深い学生なんですね。

岡田●知芳ちゃんは、「わかりません」と言って、よく質問をする学生だったことを覚えている。

知芳子●私は斎藤先生にお会いした時が印象的でした。先生が建築展の模型の展示をしている中で話しかけてくださって、先生の構造に対する熱意を感じました。こんな先生の元で勉強したいと思ったんです。

岡田●その模型は研究室にまだ吊ってあります。そっくりそのまま。フラーのテンセグリティ・ドームです。

大川●直木さんが学生時代の出来事で、印象に残っているのはなんですか。

直木●私がいちばん覚えているのは、建築展でドームのフレーム模型をつくって眺めていたら、斎藤先生が「そんなところから見るんじゃないよ。こうやって」と頭をコッソと叩かれたこと。見る位置を低くされた。

大川●人の視線なんですね。

知芳子●私も3年の時の建築展はよく覚えています。

大川●授業や製図などより、建築展の方が覚えている？

直木●徹夜で模型やパネルを、構造研究会のメンバーでつくってましたから。

岡田●5号館の4、5階を開放して建築展をやったんだよね。

知芳子●私は終電で帰って、朝おにぎ

りをもって来たら、みんな酒瓶を枕に寝ていて……。 (笑)

直木●斎藤研時代には実験のため、習志野の地下の実験室で、机に布団を敷いて、2週間ぐらい寝泊りしたのもよく覚えています。

岡田●10号館の地下だよ。

直木●そういえば、うちの父も構研だったんです。

岡田●ミサワホームの創業者三澤千代治さんもいたんだよ。

直木●今も部室はあるんですか。

岡田●あるよ。同じところに。活動はしているけど、かなりデザイン的な要素が増えた。

佐藤●現在は構造デザイン研究会という名称です。以前はデザインがついてなくて。いつ変わったのですか。

岡田●20年くらい前かな……。あのころは各大学が建築展をやっていて、活気があったよね。

直木●当時は建築学科は人気があった。今はちょっと違うようですね。

### 祖父も、父も、日大OB 現在息子が現役学生

岡田●知芳ちゃんはスタイルがよくて、背が高くして色白で、目立っていた。聞いたら、親父さんが北浦和で設計事務所を主宰していたんだよね。

知芳子●当時は大学近くの本郷が本社事務所でした。

岡田●今、彼女のいる松江田建築設計事務所というのは、お父さんの松江さんと松田さんが共同で開設した事務所ですよ。

大川●大学を卒業して、すぐにお父さんの事務所に入ったのですか。

知芳子●いえ、卒業後は西武建設の設計部に入りました。4年くらいして結婚して、その1年後に退社。それから、父の事務所を手伝うようになりました。

大川●入った時は、お父さんが所長だったのですか。

知芳子●そうです。父の亡き後は、父の右腕だった方が代表をしていました。父の四十九日の法要の翌日に長女が生まれたんですが、その時は仕事を抱えていたので、とてもたいへんでした。

大川●亡くなられたお父さんは日大OBと聞きましたが。

知芳子●1981年の新耐震設計法の委員のひとりで、日大では材料研究会にいたそうです。卒業後は建設省の建築研究所に入っていました。

岡田●昔の材研は60名くらいいましたね。知芳ちゃんは、お父さんの仕事を見ていたので、建築を目指したの？

知芳子●そうですね。祖父も建設に関係していて、家には三角スケールとか、自在定規が身近にありました。

岡田●私がこの会社を継がなくちゃ、とは思わなかった？

知芳子●そういうことは、なんにも考えてなかった。(笑)

大川●直木さんの方は？

直木●うちも日大OBです。父は先輩の小野新先生と、木村翔先生と親しくなりました。卒業後は東大の生産技術研究所の研究員にもらったようです。その佐藤泰次先生が九州大学に行くことになって、父も助手として一緒に行き、その後、九州産業大学がで



上/麻生さん夫妻が3年生の時の建築展で制作したドーム模型。知芳子さんが中に入って、記念撮影。右/地下の実験室でつくった立体トラスの模型。鉄骨の上部、左端が直木さん

きて、助教授として赴任しました。

岡田●で、直木君はなぜ建築学科に？

直木●父が仕事を直接見ていたわけではないですけど、家には資料や計算尺だとかはありました。実際に建築学科を考えたのは高校からですね。

知芳子●義母から聞いたんですけど、いくつか受かった大学の中で、入学金を振り込んだのは日大だけだったそうですよ。

大川●お母さんが決められた。(笑)

岡田●直木君のお父さんは大学の先生だから家に図面があるという感じではなかったんだ。

直木●はい、でも九大の学生はよく家に来ていました。そういう建築に関した話を聞く環境にはありましたね。

大川●現役の日大生である健太郎君は、なんで日大の建築に入ったの？

健太郎●やっぱり父の仕事を見ていたことがあると思います。

大川●いつごろから。

健太郎●中学くらいかな。ものをつくるのが好きだったので、そういう関係の仕事をしたと思って選んだのが建築でした。

大川●現場に連れて行ってもらったことはある？

健太郎●現場はないですが、建築の見学やアーキエアーリング・デザイン展などには、連れて行ってもらいました。

直木●毎年、私が担当した建物を背景に家族全員の入った年賀状用の写真を撮るんです。20年くらい続いています。家族とでかける時には、話題となった建物を見たりしています。

大川●ご両親からは積極的に日大行きを勧められたことはなかったの。

健太郎●なかったですね。もっと上の大学に行けと言われてましたけど。(笑)

佐藤●相談はしなかったんですか。

直木●なかったですね。私も浪人しているんで、浪人してもいいと思っていたのですが。

大川●息子さんが建築へ行くと言った時、なんと仰いましたか。

直木●ほんとに、いいのかと。(笑)

大川●実際に大学の授業を受けて、建築のイメージが変わりましたか。

健太郎●1年の時はあまり専門科目がないので、こんなもんなのかなと。建築基礎物理なんか、高校でやったよ



になっています。

**佐藤**●研究室の単位で考えると、集まるのが、建築を続けていく力になっているんですね。

**岡田**●毎年150人くらい集まるんだけど、みんなの話を聞くと、昔にもどるわけ。(笑)

**大川**●息子さんを含め、建築を目指す若い人に対して、伝えたいことはありますか。

**直木**●建築というのは、ものづくりなので、人と人との対話の中でできていくものだと思います。デザインや構造、

設備、施工が連携することが必要で、コミュニケーションがうまくとれないと、失敗もあります。みんなの力を合わせてものができると、すごくうれしい。

自分のやりたいことをわかってもらうためには対話力、プレゼン力が必要です。それが建築をつくる上で、いちばん役に立つんじゃないかと思います。

**知芳子**●やっぱり出会いですね。素晴らしい先生や、いい先輩、友だちに出会うこと。これがその後の人生のベースになります。

**大川**●ふたりとも、大事なものは、ものより人ってことですね。

**知芳子**●日大で得たのは、それかなと思います。

**大川**●そういう面でいくと日大は大きいから、いろいろな人がいる。デメリットではなく、数は力というくらいに考えて、いかないとね。

**岡田**●そう、さらに増やしたい。(笑)

**佐藤**●学生数が多いということは、先生も多いということ。そうすると、構造といっても、いろいろなタイプの研究をみられることになる。それが日大の強みでもありますね。

■了■

2014年6月5日理工学部駿河台校舎5号館輪講室にて



# 父の研究室で学び、ライバルに成長

増田光一(理工建築73年卒)×増田光弘(理工海洋建築工05年卒)

聞き手/大川三雄(理工学部建築学科)



親

MASUDA Kouichi  
1951年千葉県生まれ。73年理工学部建築学科卒業。博士前期課程を経て、78年博士後期課程を修了。工学博士。79年より海洋建築工学科の講師として教鞭を執る。専攻は海洋流体力学。94年より海洋建築工学科教授。海洋空間利用工学研究室を主宰



子

MASUDA Mitsuhiko  
1981年千葉県生まれ。2005年理工学部海洋建築工学科卒業。博士前期課程を経て、2010年博士後期課程修了。博士(工学)。専攻は海洋建築工学。同年より東京海洋大学海洋工学部に入り、14年より東京海洋大学大学院海洋工学系海事システム工学部門准教授

## 大学闘争直後の大学、海洋建築工学科設立のころ

**光一**●大学に入ったのは、ちょうど大学闘争が終わるころで、ちょっと前の先輩たちは、ほとんど授業なんかやっていたんじゃないかと思う。

**大川**●先生が入学した年の前年に東大闘争が起きました。

**光一**●確か連休明けくらいまで、自宅待機だったような気がします。あのころの学生は血気盛んで、通りの車をひっくり返したり、沖縄反戦デーといっちは勝手に休んだり、とにかく落ち着かなかった。闘争のイメージがとても強かったですね。

**大川**●学生数も多かったですよ。

**光一**●そうですね。300名くらいいたかな。私は一般入試で入りましたが、貼り出した合格者の名前は150名しかなかった。それなのに、習志野へ行ったら、なんだこれは、というほど学生がいた。1年過ぎて駿河台の校舎に移行できたのが、とてもうれしかったのを覚えている。中には来られない人もいましたから。

**大川**●最初の関門ですね。学生の時の印象深い授業とか、ありましたか。

**光一**●小嶋勝衛先生の授業がとてもおもしろくて、話が上手でしたから、すごく印象に残っている。話し方はやさしいのだけど、評価に関してはやたら

シビアだった。ちょうど横内憲久先生が助手でこられたころでした。

**大川**●卒業研究は加藤渉先生ですね。

**光一**●最初は市川清志先生の研究室に行っただけです。

**大川**●構造系じゃないのですか。

**光一**●計画系に行きたいと思っていて。ところが、そのころの計画系は優秀な人たちがいっぱいいたので勝てないと思ったんですよ。それで市川研を受けたんですけど、落ちてしまっ

た。しょうがないから、当時学科の主任だった加藤渉先生のところにしたんです。もし市川研に入っていたら、ふつうのサラリーマンになっていたんじゃないかと思えますよ。

**大川**●加藤研究室に入ったのが人生を大きく左右した。加藤先生は研究だけでなく、日大の主任としてもたいへん活躍されていました。

**光一**●ものすごくリーダーシップがありました。今はああいう人はいないですね。恰幅がよかつたし、迫力があ

りました。

**大川**●スケールの大きい人でしたよね。

**光一**●そのせいか、加藤研の人たちは、おおらかな人が多かったです。

**大川**●当時の加藤研にはどなたがいましたか。

**光一**●近藤健雄先生がいて、そのすぐ上に川西利昌先生がいて、その上に西條修先生がいました。

**大川**●海洋建築工学科ができたのはなん年の時でした？

**光一**●ドクター修了の1年前ですね。1年目は専門教科がないから駿河台に

いて、卒業したら講師として習志野へ行くこと、いきなり授業をやったことを覚えています。

## 成り行きで父の大学へ行き父の研究室で学ぶ

**大川**●光弘さんの大学の思い出はどうですか。

**光弘**●僕の方はそんなにおもしろい話はないんですけど。(笑)

**大川**●お父さんのいる海洋建築工学科なんですよ。どうやって進路を決めたのですか。

**光弘**●最初は考古学者になりたいと思っていました。そうしたら高校の先生に「考古学では食べていけないから、やめた方がいい」と言われてしまった。

高校3年生の時に、日大のオープンキャンパスに行きました。近藤健雄先生が講師をされていて、話を聴いたんです。

とてもおもしろそうだなって思いました。それに中、高校生くらいの時に、メガフロートプロジェクトがあつて、そのフライトシミュレーターの映像を見せられたこともありました。

**光一**●さりげなく映像を流していたんです。(笑)

うなことだったので、物足りない感じでした。

**岡田**●そうかあ。でも、建築基礎数学は違うでしょ。

**健太郎**●あれにはビックリしました。

**岡田**●建築学科の古橋剛先生がやっているんですよ。いきなり、「この建物に地震動がきたらどうなる？」って始まる。われわれの時は構造の先生は教えるのが下手でね。なに言っているのかわからなかった。ある時なんか「わかる人、手をあげて」といってもだれも

いない、「おまえらに教えることはない！」って怒って帰っちゃった先生もいました。(笑)今は上手よ、みんな。

**大川**●サークル活動はやってるの？

**健太郎**●美術研究会に入っています。

**大川**●構研じゃないの？

**健太郎**●構研にも入って何回か行ったんですが、人数が多くて先輩方と関われなくて。

**岡田**●昔は構造の研究をしていたんだけど、今はデザインもやり始めて、バラバラな感じになっちゃうんだよね。同級生の友だちとは、建築のどんなことを話している？

**健太郎**●設計の課題では、先生に説明する前に自分たちだけで、それぞれの意見を出し合ってみたり。

**岡田**●いい仲間だね。それに真面目。

## 研究室とOBとの関わりは仕事の意欲に直結

**大川**●今の建築界の状況はどうですか。

**直木**●2年前までは仕事が取れなかったけれど、最近、手をつけられないくらいになった。本当に忙しいです。

**岡田**●知芳ちゃんとは？

**知芳子**●現在保育園を設計しています。今の社会に必要なとされるものは仕事として出てくるようになりましたね。何年か前は耐震診断ばかりでしたけど。

**岡田**●そんなに多かったんだ。

**知芳子**●今も診断と補強はありますが、ちょっとずつ新築も増えたような気がしています。

**大川**●女性がずっと現役でいるのはたいへんかと思いますが、どうでしたか。

**知芳子**●バブルが崩壊する前は、とに

大川●小さいころのメガフロートのビデオも心に残っていた。

光弘●下地になったんでしょうかね。それに、ものづくりが好きだったので、建築もいいなと思っていました。

大川●入学時の印象はどうでしたか。遠慮しないで言ってみて。(笑)

光弘●入った当時は、海洋建築という割には、建築的な話をする先生が少ないと感じました。でも設計の授業は楽しかったですね。海洋工学とか、流体力学とか、応用力学などは、おもしろさが理解できなかった。今はその流体力学を研究しているので、わからないものだなと。(笑)

大川●研究室に入るのは3年生。

光弘●そうですね。3年の前期から入ります。それまでは、親子であることを隠していたんです。意外に隠せるもので。(笑)

大川●でも、名前が一緒でしょう。一文字しか違わない。周りの先生方は知っていたんですね。

光一●もちろん。

光弘●学生の間では、「増田光」の3文字目まで一緒なんで、「もしかしてさ〜」って言われる。(笑)でも、「ぜんぜん似てないよ。違う」と答えてました。(笑)とにかく、特別扱いられているんじゃないかと思われるのがすごく嫌でした。かといって、父親の授業で悪い点をとつたらまずいので、勉強は一所懸命やりました。他の先生の成績が悪くて、父に「お前、悪かったな」って言われたこともあります。(笑)

大川●それはたいへんですね。親子でなければ、わからない苦労もある。卒業研究をやるのも、いろいろあったでしょう。

光弘●なんとなくウエルカムな雰囲気があって、その中で興味もあるので入りました。大学院に行くのも、けっこう成り行きみたいな感じでした。(笑)

大川●親子関係を隠されていたのは、何年生までですか。

光弘●3年のゼミに配属されるまでです。バレた時に、1年からずっと仲のよかった友だちに、「ショックだ……」って言われてしまい、(笑)「オレたちぐらいには、言ってくれても」と。(笑)



左/2004年ころ、光弘さんが卒業研究生の時の増田研究室の様子。右奥で腕を組んでいるのが光一さん。手前の学生の左端が光弘さん

## 「浮体」の研究にのめり込み、父が論文審査

大川●結局大学院もお父さんの研究室だった。

光弘●そうですね。いざやってみたら、「浮体」がおもしろかった。設計もやりたかったのですが、内心、もしかしたら向いてないかなと考えていたんです。それで、卒論で「浮体」をやったら、意外におもしろくて。

光一●うちがいちばんラクな研究室だったんじゃないの。昔から梁山泊みたいなのもあつたし。僕の授業はちょっと変わっているからね。でも、今はヘンに人気が出て、わーっと学生が来る。「浮体」をやりたいと言っても完全な構造設計だから、途中で「なんだよ」って思う人もいる。エンジニアリングの話がほとんどですからね。

光弘●僕ぐらいの代からですね。数学が苦手でもここに来る学生が出始めたのは。(笑)

光一●でもまあ、興味をもつことがいちばん大事なことから、いいとは思いますがね。

大川●さらにドクターまで進むことになったんですね。

光弘●卒論は自分であまり満足できたものはできなかった。それで修士に進めば満足のゆくものができるんじゃないかと思って、自分なりに必要だと思うことをやりました。でも、やっぱり思ったほどできなくて、このままじゃ終われないと思った。

大川●だんだん深みにはまっていった。(笑)

光弘●それで自分から博士課程進学の話を出したんです。そうしたら、母が最初からそのつもりだったようで、「どうせなら、最後までやりなさい」と言ってくれました。

光一●私は、極力言わないようにしていました。

大川●やはり、他の研究室の方が気が楽ですか。

光一●いや、かえって他の先生に迷惑がかかるのではないかと気にもなりますし、自分のところにいた方がまだ様子もわかるしね。内心では、この分野の研究をやっている人があまりいないので、いろいろな可能性があると思ってはいました。それでも光弘もひとりの学生としかみていなかったよ。

光弘●本当に特別扱いみたいなことはなかったから、それについては、とてもありがたかった。

光一●ドクターの審査の時は、久しぶりに緊張した。(笑)

大川●自分の時より?(笑)

光一●自分の時よりも緊張したね。なん回も読んで、各章ごとで評価して。それ以来、新たな博士論文の審査の手法ができたような気がするんです。

## 親子で研究のテーマをつなげる

大川●奥さまは、なにかおっしゃってましたか。

光一●学位を取ることに喜んでいたし、大学教員になった今では、光弘の方が待遇がいい。(笑)

大川●家庭で見ているお父さんと、大

学や研究で見ているお父さんと違うところってありますか。

光弘●小中学校時代は、わからないことを聞くと、「こんなこともわからないのか」って教えてくれましたが、こちらが必死に解いている間に寝ちゃったりで、(笑)どうなんだろうと。でも、本人の前で言うのもなんですけど、研究に関しては一流だなと思っています。

大川●それは、家庭ではわからなかったお父さんですね。

光弘●そうですね、どれだけスゴイかは、やはり家庭じゃわからないですね。新しいアイデアもポンポン出てくるし、指導で言うこともすぐにはピンとこなくても、やっているうちに言っていることがわかってくる。

大川●一緒に論文も出していると聞きますが。

光一●研究内容は同じようなことですからね。この間の津波で、浮体がずいぶん打ち上げられましたが、ああいう被害をどうしたら止められるかということをやっています。

光弘●論文を出すと、同じようなテーマになるのが悩みです。僕がつくったプログラムで、日大の学生が計算してやっているの、対象が同じとなると同じような結果となる。打ち上がるというアイデアは父が出しているの、論文の共著者として書いてもらっていますが、津波の被害を防災するというような話をやろうとすると、どうしても発想が同じようになってしまいます。

光一●今のところうまい関係だったけど、スキルが上がってきたりすると、だんだんライバル関係になってくる。

大川●いいですね、親子でテーマがつなげて。

光一●いや〜、ライバルというと、相手を否定しますからやりにくいですね。(笑)かなり今、クロスしているしなあ。

## 海洋大学と日大海洋建築工学科との違い

大川●海洋大学は今年で何年目ですか。

光弘●今年で5年目です。

大川●振り返って日大との違いはなんでしょうか。

光弘●日大は学生数が多いですよ。海洋大は1学科で60人くらいしかいない。そういう点にある種カルチャーショックを受けました。とにかく規模が違う。日大は、海洋といっても建築系なので、考えることもデザインとか機能とかに気を遣う。ところが海洋大は船員養成学校です。その先生にひとつ教えてもらったのが「気合工学」と「根性力学」。(笑)必要なのは気合と根性。海には「シーマンシップ」というのがあって、海の男性的な発想なんですよ。そんなところにも、文化の違いを感じましたね。

大川●それはカルチャーショックですね。建築をやったことのメリットはありますか。

光弘●建築系出身なので、発想の根本が違うような気がします。防災用のシェルターの話をする時も、海洋大の学生はシェルターの耐久性とか安全性などということしか気にしませんが、建築でいうと、僕ならそれを都市のどこに置いて、都市計画にどのように関係させるのかを考える。そんな話をすると、学生も違いを納得する。

光一●かたちもそうよね。

光弘●かたちとか、そういう美的感覚にも大きな違いを感じます。

## 建築的な考えを海洋大へも広めていく

光一●やっぱり海洋関係は産業がまだ脆弱だから、後進が育たないんですよ。そういう意味では、海洋建築の生きていく道があると言ってもいい。だからこそ、光弘が海洋大で教員として迎えられたと

いうことでもある。

光弘●最近おもしろいのは、海洋大の学生も船だけじゃなくて、海洋開発に進みたいという人が増えてきているらしいんです。他の先生に「なんで学生たちは開発なんかやりたいのか」と不思議がられてますが、「原因は増田先生しかいないでしょ」なんて言われています。

大川●それはおもしろいですね。

光弘●ええ、それを聞くと僕が行った意味もあるのかなと、思いました。

光一●日本の船員養成はもちろん大事だけど、海事システム工学科だから、そういうことも、やらなくちゃね。

大川●でもいいですよ、親子で話すことがあって。

光一●それ以外の話をしないので、よくないですね。(笑)海洋を始めたのは、たまたま加藤先生のところにいたということもあるし、違った方向のものをやりたいというのもあった。建築って、おおらかで、漠としているんだけど、ちゃんと芯をとらえている感じです。海洋建築という分野は建築でもないし、海洋でもないところがある。建築学会に行ってもマイナーだし、海洋に行ってもマイナーで。結局すき間学問なんだと思ったりして。海洋大は王道だからいいだろう。

光弘●そうは言っても、海洋大の中のすき間ですから。(大笑)

大川●いやいや、すき間じゃなくて、つなぎ目ですよ。

光一●そうだよ、それがいいところだと思うよ。やっぱり分野が定まらないって、ものすごく苦労する。ひとつの分野として確立させるために、微力を尽くすしかないね。 ■了■

2014年5月30日理工学部駿河台校舎5号館会議室にて



# 時代が違って、生き方は共通して

佐藤義信(理工建築72年卒)×佐藤明生(理工建築04年卒)

聞き手/大川三雄(理工学部建築学科)

親



SATO Yoshinobu

1949年東京都生まれ。理工学部建築学科卒業後、東京藝術大学美術専攻科(大学院)に進む。修了後、結婚と同時に日建設計に入社、1年の研修を経て名古屋に転勤。主な仕事は、今年JIA25年賞を受賞した岐阜県美術館をはじめとする博物館、図書館、大学など教育・文化施設、公共施設。並行して国立大学で10年にわたり講師、学会評議員などを歴任。46歳の時に京都迎賓館の設計者に選定され「卒業制作」として現場まで一貫して関わる。2012年に日建設計を退社し、KUU・KAN設計室を設立、純木造の寺院などに取り組む

子



SATO Akiyo

1986年愛知県生まれ。2004年、日本大学理工学部建築学科卒業。10年、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復建造物研究室修了。同年より公益財団法人文化財建造物保存技術協会に入会し、国宝、重要文化財その他の文化財建造物等の保存修理の設計監理業務に携わる。現在、同協会札幌監理事務所に所属。佐藤義信の三男

## つまらない日大の授業と仲間とのアトリエ活動

**大川**●学生時代の話から始めます。義信さんが入学した1968(昭43)年という大学紛争の真最中ですよ。そのころの大学はどういう状況でしたか。

**義信**●そもそも私は高校の時から、「ベ平連(ベトナムに平和を市民連合)」の活動とか、美濃部都政を実現しようなど、の運動に参加していました。

**大川**●筋金入りの闘争世代ですね。

**義信**●団塊世代ですから、たいへんな人数がいた。大学だって浪人するのが当たり前だった。

**大川**●授業はちゃんとありましたか。

**義信**●授業をロックアウトした方でしたからねえ。授業らしい授業もなかった。

**大川**●有志の人たちが前川國男さんたちを呼んで自主講座をやっていたと言いますけど。

**義信**●やっていました。通常の授業より、よっぽどおもしろかった。でも期待して入った大学は「なんだこりゃ」という状態ですよ。結局大学には行かず、本郷に仲間と「無展望」というアトリエをつくった。当初は雑誌『新建築』の図面の版下を描いて部屋代を稼ごうと思ったのですが、1枚500円で、とんでもなく効率が悪かった。コンペの賞金の方がずっといい。4人いたから、4作品出して、金賞、佳作、佳作とか。入選すると、授

賞式の新幹線代まで出してくれる。

**大川**●その時の学生数は多くて、4クラスもあり、全体で600人くらいいました。

**義信**●とにかく、先生は遙か向こうの方において、黒板なんか見えないんですよ。「ふざけんな」と思いました。学校には期待できないと、けっこう真剣に時間対効果を考えた。学校に行かずに一級建築士になるには、どのくらい時間がかかるのか、本当に設計やりたいのだけど、やれるまでどれだけ時間がかかるのかとか。それでアトリエの名前を「無展望」とした。本当に展望なしだったので。

**大川**●「無展望」のメンバーはどなたがいたのですか。

**義信**●佐原滋元、彼は向島百花園の女将佐原洋子さんの息子。最近亡くなった高本勝、もうひとりが新木隆。僕以外はみんなまちづくりをやっていた。

**大川**●みんな同じ学年なんですか。

**義信**●同級生です。自分で勉強するから効率が悪いでしょ。だからものすごく勉強しながらコンペに応募していた。

**大川**●記憶に残る授業はないですか。

**義信**●まったくない。

**明生**●それって納得できないなあ。学費を払って学校行かないなんて。しかも、別に拠点をつくったりして。

**義信**●結局は「時間」を買っているんだよね。

**大川**●明生さんは建築学科に入って感じたことは？

**明生**●デザインに飽きちゃうという瞬間がありました。それも、今の話で共通するなと思ったんですけど、線を描いたり、かたちをつくったりするのはおもしろかったから、設計の授業は一所懸命やるんですけど、ある時からつまらなくなりました。

**大川**●どういうこと？

**明生**●授業ではある程度やっていけば、ごまかせるようなところもあって。それで飽きちゃって、歴史の方がおもしろくなってしまった。そのへんも、似ていると思いました。

**大川**●お父さんの時代と違うと思うところは？

**明生**●違うのは、私は学校にはよく来て、授業は出まくってました。単位も取るだけ取りましたし。同じ学費を払っているのだから、なるべく多くの単位を取った方がいいと思った。一般教養の授業もいっぱい取りました。今思えば、そういう授業も役に立っている。心理学の授業は本当におもしろかった。その一方で、教えようとする気のない先生もいて、授業の途中で止めちゃうことがあったんです。それで教務課に行って「この人なんかしろ！」って抗議したこともあった。でも、その時は「まあまあ」となだめられました。

**大川**●そういうところも、お父さんと似ていますね。(笑)

## 建築を志すきっかけと気づかなかった共通点

**大川**●義信さんが建築学科に進学したきっかけはなんでしたか。

**義信**●根っこは家にあった平凡社の百科事典。この本に載っていた菊竹清訓さんのスカイハウスの写真を見まして、「カッコイイな」と思ったことです。それに親父は普請道楽。そういう影響もあって建築家を目指しました。親父はゼロ戦のエンジン開発に関わっていたので、家に青写真がたくさんありました。裏が真っ白なので、それを竹の定規で小さなサイズに切って僕用の画帳にしてくれて、それに絵を描いていた。

**大川**●こういう話を直接聞いたことある？

**明生**●ないですね。(笑)でもやっぱり自分と共通する部分があるなあと思いつつ聞いていました。

**大川**●どういうところ？

**明生**●僕も小さいころ落書きをしていたのは、青図の裏だったし(笑)。

**大川**●なるほど。

**明生**●裏白の広告を探して絵を描いたら、いっぱい図面をくれたんです。義信さんもわか家のいたるところに手を入れていたし。

**大川**●義信さんと呼ぶんですか。

**義信**●今日は「さん」がついているね。(笑)

**大川**●お父さんの幼いころと同じように絵を描いていたんだ。

**明生**●私はものづくりがずっと好きで、いつもなんかしらつくってました。

**義信**●壊すのも得意だった。(笑)ドラ

イバーひとつで、みんなバラバラにしちゃう。ドライバーが最大の友だち。

**大川**●家の中にもものづくりに寛容な環境があったんですね。

**明生**●知らず知らず、なにかつくりたいと思っていた。最初、なにやろうかと相談したら「なんでもいいんじゃない」と言われて、仏像が好きだから、仏師でもいいんじゃないかとか。でも食べてはいけないと思っちゃった。それで、間違えて建築入っちゃった。

**大川**●明生さんの学生時代に、義信さんは建築に関するアドバイスはしていたんですか。

**義信**●ほとんどゼロですね。

**明生**●そのころ吉祥寺にいたでしょう。

**義信**●そうだね。それで、カレーをつくって送ってあげた。友人ふたりと合宿生活をしてたからね。

**明生**●義信さんのようなアトリエじゃないですけどね。

**義信**●当時は単身赴任で東京にいた。週末はやることないから、肉を大量に買い込んで、カレーとかハヤシソースをつくっては吉祥寺に送ったんだ。

**明生**●その時に一緒に住んでいたふたりは、義信さんを「カレーのおじさん」と呼んでいた。(大笑)

**大川**●建築設計の相談はしなかったんですか。

**明生**●しなかったですね。相談すればよかった。

**大川**●明生さんは、なぜ建築学科を目指したのですか。

**明生**●もともと、ものづくりというテーマがあって、建築は父がやっている立派

な職業という意識があったのかもしれないですね。

**義信**●他人のお金で楽しめて、しかも設計料までもらえる、こんないい仕事はない。(笑)

**明生**●そう、でも自分では住めない。そこが違うんだな。

**義信**●ま、つくるまでのプロセスがおもしろいんだよね。

## 「なにをつくるか」ではなく、「なんでつくるか」を考える

**大川**●卒業研究は親子で歴史の研究室でした。義信さんの卒論のテーマはどういうものでしたか。

**義信**●タイトルは忘れましたが、教会前広場の起源を取り上げました。素朴に疑問に思ったのが、ドイツにゴシックがあつて、なんでイギリスにないかということなんです。調べてみるとおもしろくってね、要するに聖と俗がひっくり返っている。封建領主が割拠したのがドイツで、商人が領主に利益をピンハネされないように、あるエリアを教会と結託して築市・築座状態にした。建築をどうデザインするかよりも、なんで建つたのに関心があった。

**大川**●政治の時代ならではの卒論テーマですね。

**義信**●4年生で考えたんですから、われながら、偉いものです。(笑)

**大川**●それで、大学院はなぜ藝大へ。  
**義信**●まずは、大学での勉強をあまりしなかったの、もう少し勉強してもいいかと思ったことがひとつ。ともかく大学生活をちゃんとやってみようと思った。藝大大学院で山本学治先生の研究室に行ったのは、彼がマルキストだったという非常に明快な理由です。彼は当時「大きな技術」と「小さな技術」ということを唱えていて「大きな」は病院、「小さな」はクリニックに例えていて、日常的な健康管理はクリニックだけど、手術は病院でやるものだと。君はクリニック型ではないと言われました。それで日建設計を受けてみるかということになった。採用通知は卒業の年の1月半ばでした。当時はそんなもんでしたね。

**大川**●明生さんも大学院は、最初から藝



上/1990年ごろの佐藤さん一家。3歳の明生さんを抱えているのは長男の健太さん、後ろですましているのは次男の洋平さん。義信さんの妻の静香さんは、日大の同級生。右/牛乳パックを使ったものづくりに凝っていたころの明生さん。得意満面の記念撮影

大って言っていたよね。

**明生**●藝大の大学院では建築じゃなくて、文化財保存学の研究室へ行ったんですけど重要文化財の修理などをやってみたくてというのが動機です。現在は文化財建造物保存技術協会という団体に入っています。

**大川**●具体的な仕事の内容は？

**明生**●国宝、重文建築物の保存修理工事的设计監理や調査を行う団体です。1971年に設立されました。藝大の文化財保存学という専攻科目は、文化財に関連した他分野が全部集まっているから、各分野の講義があります。建築だけでなく、絵画や工芸、彫刻であるとか、保存科学であるとか。文化財保存をひと括りにして、分野の垣根がない専攻でおもしろかったですよ。こういうのが日大にもあったらなと思います。

**義信**●建築の幅は広いから保存をやっていくのもいいなと思います。一回の人生ですから、おもしろいことをやるのがいい。**大川**●建築というより、歴史という共通点があるようにみえますね。**義信**●日本では建築学と建築工学が未分化ですよ。外国では建築学科は文科系ですよ。でも日本では、理工系だと思われているので「なんでつくるか」という考察が足りない。

**大川**●そうですね。そうすると、藝大がいちばん近いですね。日大理工の建築学科は、ある時期からコース制にしました。今は環境構造、設計計画、企画経営(不動産)というふうに分けているんです。でも考えてみると、最初から分けてしまうよりも、日大はごった煮みたいな総合教育の方がよかったのではないかと、思うことがあります。

### 卒業してから思う 大学の役割

**義信**●卒業しても、大学時代の仲間はなにかあると集まっています。長い間名古屋へ行ったということも関係しているのですが、学校には本当に久しぶりに来ましたが、基本的には子どもたちに干渉しませんし、自由意志で動けるのが、親の甲斐性だと思っています。

**明生**●自由な環境であるがゆえに、い

2014年春、アトリエ「無展望」時代の仲間が集った、向島百花園の女将佐原洋子さん(前列左から2番目)の誕生会。後列左から2番目が義信さん、前列右端は洋子さんの息子でメンバーのひとりの佐原滋さん、後列右端が榊木隆さん。もうひとりのメンバー高本勝さんは、この会の数日後に逝去した



ろいろな共通点があるような気がして、おもしろいですよね。

**義信**●フリーと身勝手とは違って、社会人として自覚をもってということです。

**大川**●大学時代のいちばんの財産は友人ということですかね。あの時代だからこそ、つながりは強かったでしょう。

**義信**●日本では、大学受験で若い情熱をすり減らしてくるでしょ。僕は今年のセンター試験をやってみたけど、あれはスキルですよ。単に訓練の成果を問うのであって、知恵にならない。だから大学に入ってから伸びないんだよね。欧米は簡単に入れるけど、簡単に出さない。だから権威がある。卒業は大学の社会に対する「性能保証」。建築士だってそう。今の日本は、そういうことをちゃんとやっていない。卒業が軽すぎる。

**大川**●うちではささやかながら卒業試験をやっていますよ。そうは言っても、学生を減らすと、教員もその分減ってしまう。規模の大きい日本大学はいろんな分野の教員がいることが、特徴のひとつになっているので、バランスをとりたいところですよ。だから、学生はある程度いた方がいいと思っています。

**義信**●それほど大きいのに、同窓会組織がちゃんとあることがスゴイね。ちゃんと卒業を厳しくして「あの試験を潜り抜けた」という、同窓生同士、連帯感ももてるなにかがほしいなあ。

**明生**●なかなか一気にはできない。

**義信**●そう。でもね、変わっていますよ日本も。この20年で建設投資は年3%縮小を続け、半減した。それに対して職人数は3割減だった。職人が余ったんです。それがワンコイン職人となり、廃業に進んだ。今ごろ景気浮揚だとかいって、公共事業を始めたけど職人がいない。大学は一種の装置産業でしょ。全入時代ですから、これから先の大学のあり方が将来を決めると思うんです。

**明生**●仕組みが美しいものはかたちも美しい。国も大学も一緒ですよ。

**義信**●そうそう。本当のデザインというのはインセンティブなんです。自分の力なんて知れているのですから、どうやって誘導するかがデザイン。政治もそうあるべきなのですが、今はなにもない。凶面だつて、意志を伝えるためにある。わからなければ、「いい建築つくってね」って書いとけばいいでしょ。(笑)

**明生**●それは極論です。(笑)希望は三代目。もう一代続いたらおもしろいよね。

**義信**●そうだね。(笑)建築なんて総合芸術なんだから、なんでもできることもあるし。

**大川**●卒業生が全員建設業へ行かなくてもいいと思います。だけでも、建築を学ぶことによって、いろいろな知見が深まると考えれば、OBたちの活躍の可能性もどんどん広がります。 ■了■

2014年4月19日理工学部駿河台校舎5号館会議室にて



# 斎藤賞・加藤賞・桜建賞

## 2013年度受賞作品の紹介

### 斎藤賞

#### 床衝撃時における乾式二重床構造の伝達加振力の予測計算方法

田中元規 (理工建築/修士論文/現・大林組) 指導/井上勝夫教授

近年、RC系集合住宅の床仕上げ構造として乾式二重床構造が多く採用されている。しかし二重床の重量床衝撃音遮断性能はスラブ素面に対して1~2ランクほど低下するケースが多い。その理由として、床衝撃音の発生系として、複雑な振動系が付加されるためであり、精度の良い予測法を確立することが難しい状況にある。

重量床衝撃音の予測方法については、日本建築学会から刊行されている『建物の床衝撃音防止設計』が実務で多く利用されて

いるが、乾式二重床構造まで含めた予測計算方法までは至っていない。

本研究は、二重床における衝撃力の伝達系を支持脚系と床下空気弾性系に分けて扱ったところに研究の特徴があり、床衝撃時にスラブの各位置に入力する支持脚加振力および空気加振力を推定することで、下室の重量床衝撃音予測計算結果が実測値と良い対応を示すことを示したものである。本成果は、専門分野の研究状況からみても、非常に有用な知見と言える。

### コンクリートポンプ工法におけるコンクリートの品質変化および管内圧力に関する研究

宮田敦典 (理工建築/修士論文/現・日大理工学部建築学科) 指導/中田善久教授

コンクリートポンプ工法は、現在のコンクリート工事において汎用的な工法となっている。このコンクリートポンプ工法を用いた施工計画を立案する上で、コンクリートの品質変化および管内圧力の挙動を把握することは無視することができない重要な要因である。

そこで本論文は、コンクリートポンプ工法における圧送距離の変化によるコンクリートの圧送前後の品質変化および圧送距

離と管内圧力との関係を明らかにするために、コンクリートポンプに関する文献調査を行い、その傾向の妥当性を圧送実験により検討した。

その結果、コンクリートの圧送後の空気量は増加する傾向を示し、従来のポンプ指針と異なる傾向が明らかとなった。

本論文の成果は、今後のポンプ指針の改定において非常に有益な資料になると確信している。



コンクリートポンプ工法の圧送実験の様子

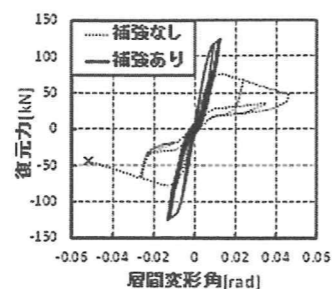
### 簡易耐震補強された木造住宅の地震応答解析

茂木大佑 (生産工/修士論文/現・日本建築構造センター) 指導/神田亮教授

阪神・淡路大震災で多くの木造住宅が倒壊し、現在も大規模な地震の発生が危惧されている。木造住宅の耐震化は急務となっているが補強費用の個人負担が大きくなり、耐震補強を断念するケースが多い。これを受けて本論文では耐震補強目標を人命の保護とした簡易な補強を施した木造住宅であっても倒壊を防げる可能性があるかを動的解析で評価することを試みた。

既存の軸組木造住宅を解析対象として、住宅を構成している壁の動特性、接合部の状況や劣化事象を解析に考慮した。簡易な補強として劣化部分を補修して筋かい壁を導入すると仮定した。3つの木造住宅に対して解析をした結果、過去に日本で観測さ

れた地震波に対して補強する前は倒壊してしまうが、簡易な補強を施すことで倒壊しないことが確認された。今後は同様な解析を数多くの住宅に対して実施していくことで、簡易な耐震補強による倒壊防止効果をより明確にし、木造住宅の耐震化促進につながることを期待したい。



### ローマ市の街路空間における探索歩行時の注視に関する研究

薄井謙 (工/修士論文/現・アイサワ工業) 指導/三浦金作教授

本研究は、中心市街地内の街路空間における探索歩行時の注視に関する一連の研究として位置づけることができる。都市の中心市街地における経路探索歩行は、氾濫する多様な情報の中から、歩行者が獲得した空間情報を利用して目的地まで到達する移動行動ととらえることができる。しかし、既往の研究ではヴェネツィア、フィレンツェ、仙台いずれの実験対象地とも、自動車交通との関わりは薄い歩行者専用道路であり、自動車交通の

ある実空間での探索歩行・注視実験の実施と分析は重要な課題となっていた。

そこで、本研究では自動車交通のある実験対象都市として、イタリア屈指の観光都市・ローマをとりあげ、不慣れな市内の代表的な観光スポットを巡回する移動歩行実験を実施し、日本人被験者の探索歩行時のサイン情報の分析、情報収集と経路選択・探索行動との関係、および注視対象・回頭・立止り・滞留などの注視行動と傾向を明らかにした。

### 高強度長方形断面 CFT 柱の圧縮性能に関する実験的研究

杉本太一 (理工海建/修士論文/現・日本郵政) 指導/中西三和教授、北嶋圭二准教授

CFT(コンクリート充填鋼管)構造は高強度材料の普及により、超高層などの大規模な建築物の高軸力を負担する柱として数多く利用されている。近年、建築計画上機能的な空間を得るために長方形断面 CFT 柱が採用されるようになった。長方形断面では、柱断面の長辺と短辺の板厚を変えることにより、構造的により合理的な CFT 柱を設計することが可能であるという利点がある。しかし、長方形断面 CFT 柱に関する実験データは乏しいのが現状である。

本研究では長方形断面柱 CFT 柱の圧縮性能を検討することを目的として、30MN 大型構造物試験機を用いた中心圧縮実験を実施した。実験結果から、長方形断面 CFT 柱の軸圧縮耐力を正方形断面 CFT 柱と同様、累加強度式評価ができることを確認した。一方、長方形断面では、最大耐力以降の応力-ひずみ関係の軟化曲線の勾配が急であり、脆性的であることから、各辺の板要素の幅厚比や鋼管耐力比が拘束効果に及ぼす影響が大きいことを明らかにした。

### 避難誘導のための津波ハザードマップ開発に関する研究

高山淳平 (理工海建/修士論文/現・国際航業) 指導/増田光一教授、居駒知樹准教授、恵藤治朗助教

本研究では災害時に避難誘導を支援するための津波ハザードマップの提案と避難困難区域を明らかにすることを目的としている。わが国では東日本大震災の経緯から南海トラフ巨大地震への防災意識が高まっており、ハード、ソフト面の各対策の再検討がなされている。

南海トラフ巨大地震は東日本大震災と同等の津波災害が生じると推測されているため、ハード対策のみでは防災対策としては不十分であり、ソフト面対策を整備する必

要があるとされ、特に有効的な津波ハザードマップの情報整理が重要な項目となる。また、津波浸水時での避難行動を予測し、津波避難場所に対する検討を行うことは、人命保護を主眼においた減災対策を講じるために必要な項目であると考えられる。

本研究では、これらの項目を津波伝播シミュレーションと避難行動シミュレーションを同時に解析することで明らかにし、避難困難区域を抽出するための被害推定手法としての有用性を明らかにした。

### 港湾内における浮体式棧橋を用いた船舶の津波被害低減法に関する基礎的研究

村田一城 (理工海建/修士論文/現・日大大学院) 指導/増田光一教授、居駒知樹准教授、恵藤治朗助教

本研究は、港湾内の船舶の津波被害低減手法に関する研究であり、特に浮体式棧橋に船舶を係留することによる減災効果に関して着目したものである。

これは 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災時に宮城県塩釜港内にある浮体式棧橋に係留された観光船の係留索が破断せず漂流しなかった事例をもとに提案されたものである。本研究では、船舶を浮体式棧橋に介した場合の係留索張力の軽減効果を解

析することでその評価を行った。また、浮体や船舶規模の関係から上述した効果において検証を行うことで、浮体式棧橋に係留した場合におけるもっとも効果的な係留手法の検討を行った。

加えて、本研究では他の津波被害低減手法として緊急時海底係留索を用いた係留手法に関して提案し、その適用可能性において検証を行った。

### ケーブルを用いたスポークホイール型観覧車の基本的構造特性に関する研究

宮本悠平 (理工建築/卒業論文/現・日大大学院) 指導/岡田章教授、宮里直也准教授、廣石秀造助手

2007年の基準法改正を機に、高さ60mを超える遊戯施設に対しても他の建築と同様に大臣認定が必要となり、時刻歴応答解析を用いた地震動に対する検討や長周期地震動に対する検討が必須となった。これにともない、2007年以降、大規模な観覧車は建設されていないのが現状である。このような状況を踏まえ、大規模な観覧車に対

象として、基本的構造特性について実験と数値解析の両面から検討を行った。

また観覧車の構造形式として、わが国では実施例のないスポークホイール型観覧車を選択した。この観覧車は自転車の車輪に似た部材構成を特徴としており、従来に比べ風の影響を受ける投影面積が小さく、ケーブルとリングによる構造的合理性に富むと期待される。

本研究では模型による静的載荷実験や時刻歴応答解析を含んださまざまな解析を行うことで、リングの崩壊が面内方向の曲げモーメントに依存すること、ケーブルの本数の増加とともに軸力抵抗系が発揮され、構造的合理性が向上することなどの性状が定量的に把握された。



シンガポール・フライヤーのスポークホイール型観覧車

### 試験方法の違いによるコンクリート供試体の体積ばらつきに関する一考察

田部菜津子(理工建築/卒業論文/現・日大大学院) 指導/中田善久教授

コンクリート供試体の体積を測定する方法として一般的にノギス法および水中質量法の2つがあるが、ノギス法はコア供試体のように表面に凹凸を生じる場合、ばらつきが大きいと考えられるのに対し、水中質量法は試料の形状に関係なく測定が可能ではあるものの、コンクリートのように吸水



コンクリート試供体とノギス

する供試体の吸水状態によって誤差を生じることが想像に難くない。

そこで、本研究はコンクリート供試体の体積の測定方法により生じるばらつきが各試験結果に及ぼす影響について検討するために、ノギス法および水中質量法における体積を水セメント比、型枠、供試体の種類および養生方法の違いについて比較を行った。その結果、両測定方法により求めたコンクリート供試体の体積の差は約±2%の範囲に分布しており、水中質量法により求めた体積のばらつきの方が大きくなる傾向を示した。

### 床仕上げ材の違いによる歩行感覚評価の検討

榎本巽(理工建築/卒業論文/現・大建工業) 庄司綾(同左/現・総合積算) 指導/井上勝夫教授、富田隆太助教

住宅の床は常に人が接する重要な部位であり、安全性、安定性以外にも快適性など、多くの性能が要求される。素足を基本とする生活様式であるわが国の場合には、歩行感覚は居住性からみた重要な性能のひとつと考えられる。

本研究では、床の総合性能の向上を目指し、床の要求性能に関するアンケートを行った。また、歩行感覚から見た床のかたさ感覚に着目して、住宅で用いられているさまざまな床仕上げ材を対象として、歩行

感覚評価実験や変位量測定を行った。特に、感覚評価実験では、室用途を想定して評価してもらうことで、各室用途に適した床仕上げ材の検討を行った。

本研究の特徴は、足裏のかたさを感じる部位が床仕上げ材の表面材によって変化することを明らかにしたことであり、床材の歩行時のかたさ感覚からみた評価方法を検討していく上で、かたさを感じる足裏部位を考慮していくことの重要性が示された。

### 家具デザイナー・水之江忠臣のデザイン活動に関する研究

-戦後日本の家具デザイン史における位置づけ-

出口順平(理工建築/卒業論文/現・日本住宅) 指導/大川三雄教授、河合晴香助手

家具デザイナー・水之江忠臣(1921~77)は日本大学の卒業生であり、前川國男建築設計事務所が家具部門を担当し、建築家とコンビを組んだ家具デザイナーの先駆者である。

代表作の「ミズノエ・チェア」は天童木工で1954年から現在まで60年も販売されているロングセラー商品である。しかし、水之江



左/水之江忠臣  
下/代表作の「ミズノエ・チェア」

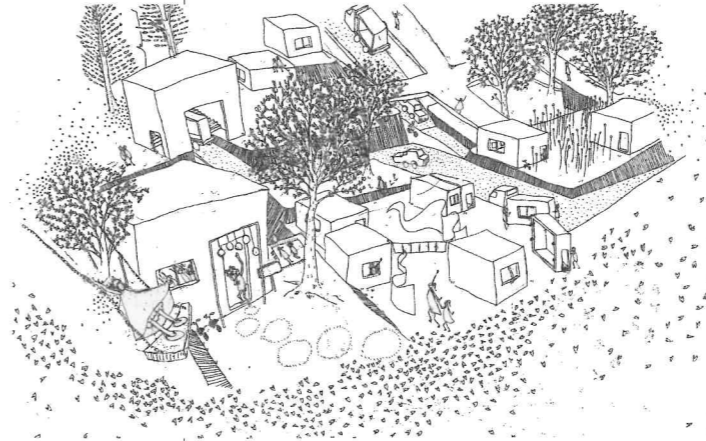


の活動は長大作、剣持勇などが活躍した家具デザインの黄金期に埋もれてしまう。

本研究は家具デザイナー・水之江忠臣のデザイン活動を明らかにしたものである。水之江は家具の設計活動、執筆活動、展覧会などのその他の活動の三つを柱に啓蒙活動を行った。水之江は家具デザインをする上で、掛け心地などの実用性を考慮した生産家具を中心に、大衆に質の高い家具を提供するために家具産業の向上による家具の平均水準の向上に貢献した。戦後のデザインが先行した家具デザインの黄金期において、水之江の活動は家具デザインにおけるテクニカルアプローチの提唱であった。

### 在り触れる美術館

小笠舞穂(理工建築/卒業設計/現・日大大学院) 指導/佐藤慎也准教授、二瓶士門助手



今日、アートは多様な変化を遂げている。圧倒的な技術や感性を見せつけるだけでなく、日常につながる気づきを与えることもまた、現代におけるアートの役割である。

アートを鑑賞するための美術館は、かつては「美の殿堂」と呼ばれ、立派な建築が山のようにつくられてきた。しかし、アートが変化している今、これまでどおりの「美の殿堂」は、はたして鑑賞のための場としてふさわしいものだろうか？

アートは日常につながるものになったのだから、それを鑑賞するための美術館だって、もっと日常に近いところにあった方がいい。環境はよいか駅から離れた公園に隣接するよりも、いつそのこと駅前にあった方がいい。厳めしく巨大な建物よりも、ささやかな建物であった方がいい。こんな鑑賞の場への提案は、近未来へのリアリティをもつだろう。

※P24に関連記事掲載

### 「サブリース事業」による歴史的建造物の空き家活用に関する研究

田中悠貴(理工建築/卒業論文/現・積水ハウス) 指導/川島和彦准教授(まちづくり工学科)

歴史的建造物の活用においてはハード・ソフトの並行した整備が求められている中、それを効果的に進めるための方策として歴史的建造物の転貸によって所有者と管理者および入居者の分離をはかる事業(サブリース事業)に着目している。

本研究は具体事例の実態の調査・分析

から長期的な活用を促した要因を明らかにし、事業を行う際の留意点を示したものである。

全国の取り組み事例を調査したうえで、先進的な取り組みを行っているいくつかの地域に密着して調査・分析を展開したものであり、卒業研究として高く評価した。

### 都市の水辺を活用した小学校における環境教育に関する研究

-東京都江戸川区を対象として-

津端里佳(理工海建/卒業論文/現・藤田建装) 指導/畔柳昭雄教授、坪井朔太郎准教授

都市の中の水辺空間が子どもたちの環境教育の場として活用され始めている。本研究では、今後の水辺環境整備に資する計画的示唆を得るため、都内の中でも先進的に親水整備に取り組んでいる東京都江戸川区の水辺を活用した環境教育に着目し、都市の水辺が環境教育に与える影響やその効果を把握することを目的としている。

江戸川区は、荒川と江戸川に挟まれ、区内には18の親水緑道と5つの親水公園が整備されている。こうした水辺を区内の約

8割の小学校が授業で利用している。その中で、授業の場としては、荒川と江戸川の利用が多く、親水緑道や親水公園の利用は少ないことがわかった。また水辺の活用方法は、小学校の近傍で整備された水辺空間の状況に合わせた使い方が各々なされており、授業以外でも給食を河原でとるなど多様な取り組みが行われていることがわかった。

今後は、これらの地域資源の重要性を教員個人が認識し、水辺の活用方策を提案していくことが重要と考える。



### PC構造の復元力特性に関する研究その1

一瀬祐介(理工海建/卒業論文/現・三井住友建設) 大川峻(同左/現・日大大学院) 指導/浜原正行教授

PC部材の復元力特性は、紡錘型の履歴を描くものから、原点復帰傾向の強いS字型の履歴を描くものまであり、その履歴性状は極めて多様である。PC部材の復元力特性モデルは、この多様な履歴性状を再現できるものでなくてはならない。このような要件を満たすモデルとして、浜原・尹が提案したものがよく知られていた。PC部材の履歴ループは、初期の段階ではS字傾向が強いが、変形の増加にともなって徐々に鈍化することが知られている。

本研究では、浜原・尹モデルでは上述の履歴性状をうまく再現できないことを示した。次いで、この問題点を解消するために、浜原・尹モデルに対して修正を加えた。さらにRC部材を含む81体の系統的な実験から得られた資料を用いて、このモデルの実験結果に対する適合性の検討を行った。その結果、修正モデルは上述の問題点が解消できているだけでなく、残留変形率、等価粘性減衰定数も比較的精度よく推定できることが明らかになった。

### 津波漂流物の衝突を想定した部材の挙動に関する基礎的研究

-弾性部材を対象とした錘の衝突実験-

菅野裕識(理工海建/卒業論文/現・日大大学院) 早坂祐貴(同左/現・富士ピー・エス) 堀内栄治(同左/現・西松建設) 指導/中西三和教授、北嶋圭二准教授

東日本大震災では、津波によって多くの人命が失われた。同時に、津波漂流物の衝突による建築物の被害が数多く報告された。本研究は構造物への津波漂流物の衝突による衝撃的な荷重や部材挙動の把握を目的として行った弾性体(鋼製梁)への錘の落下実験である。

小型船舶や普通自動車を津波漂流物として想定し、津波遡上速度による漂流物の衝突現象を再現することを目的とした、スチロール樹脂製の簡易な梁モデルの実験と、

2枚の溝形鋼を組み合わせた鋼製梁への錘の落下実験を実施した。鋼製梁の落下試験では質量60kgの錘を使用した。

いずれの実験でも、運動エネルギーとひずみエネルギーのエネルギー保存則に基づいて衝突荷重と衝突時の変形量の関係を理論的に把握できること、実験結果がエネルギー保存則を満足するものであることを明らかにした。また、鋼製梁の実験では衝突速度が速くなると衝突荷重が著しく上昇する荷重効果を確認した。

### 歴史的建造物の維持保全に関する研究-れんがのひび割れ補修に関する研究-

山口徹(生産工/卒業論文/現・タクトホーム) 指導/永井香織准教授

近代の歴史的建造物には、れんがが多く用いられている。しかし、外装材として使用されているれんがは光や風・雨などによる影響や長期的な建物の挙動などにより、ひび割れなどの劣化が発生している。

また近年、建物の長寿命化が目される歴史的建造物においても維持・保全計画が重視されている。建物の代表的な補修方法として、ひび割れ注入材が用いられているが、れんがに対する評価を行った例が少ないのが現状である。

本研究は、れんがに適した注入材選定を

目的に、各種注入材について付着試験と2種類の水劣化試験(水中浸漬試験を1200時間、乾湿繰返し試験を300サイクル)を行った。その結果、付着試験は注入と塗布した場合で同程度の接着強さであった。

劣化試験では試験前に比べて接着強さが10%以上低くなる傾向を示し、乾湿繰返し試験よりも水中浸漬試験の方が水に浸かる時間が長いので接着強さが低くなった。

以上の結果より、れんがに有効な注入材が明確となった。

### 長方形CFT柱の繰返し曲げ性状に関する研究

岡修平(生産工/卒業論文/現・日大大学院)、菊池利央(同左/現・建装工業) 指導/藤本利昭准教授

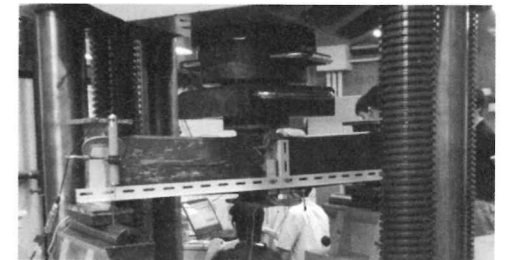
CFT構造の柱は、主に円形・正方形断面が使用されているが、建築物は平面的にX・Y方向ともに均等な建物は少なく、柱断面を長方形にできれば、より合理的な設計が可能となり設計の自由度も拡大する。しかし、適用に明確な規程がなく、実験資料もわずかである。

本研究では、地震時における長方形CFT柱の構造性能を明らかにするため、繰返し曲げ実験を行い、曲げ性状の検討を積み重ねた。

実験結果から、長方形CFT柱は正方形

CFT柱と同様に評価でき、設計条件に合った最適な断面にすることで、効率・自由度の高い設計が可能になることが明らかになった。

曲げ実験風景



### 一農村集落の「集い」にみる「助け合うコミュニティ」形成に関する研究

遠田拓也(生産工/卒業論文/現・東北大学大学院) 指導/篠崎健一准教授

私の故郷には、人びとが集う小さな薪ストーブ小屋がある。人はそこでくつろぎ、談笑する。その場所は豊かなコミュニティの核である。

東日本大震災の時、その小屋はたくさんの人の避難場所となった。自然災害が懸念される今、都市に必要な「助け合うコミュニティ」再生の鍵は、農村社会における「集

い」にあると考える。

本論文では、農村の「集い」形成の仕組みを探り、都市における「集い」再生の可能性を提案する。

さらに、研究の成果を卒業設計で実現し、豊かな地域社会形成のための新しいまちのあり方を示したい。具体的な構想は、設計「のりしろ大学横丁」で示した。

### のりしろ大学横丁

遠田拓也(生産工/卒業設計/現・東北大学大学院) 指導/篠崎健一准教授

人がただすれ違うだけの街は、故郷(ふるさと)にはならない。農村社会では、人びとが集うことで自然に「助け合うコミュニティ」がつけられてきた。そんな農村型の「集い」の仕組みを都市的な環境の中で実現できないだろうか。

日本大学と東邦大学が街の「のりしろ」となり、学生と地域の人びとが自然に集う。「のりしろ」は、南の商店街と緊急避難場所である北の小学校へとつながっていく。

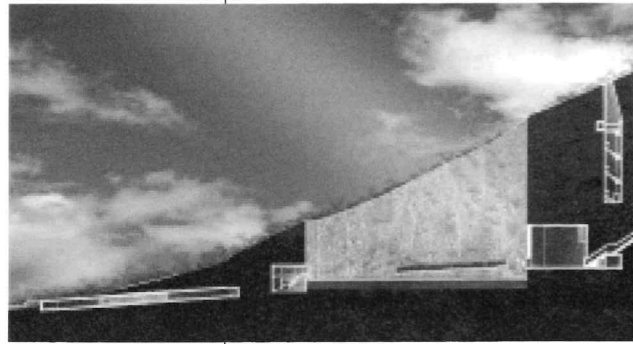
自然災害が懸念される今、「のりしろ大学横丁」の設計を通して、豊かな地域社会と新しい街のあり方を提案する。

基本的な考え方は、論文「一農村社会の「集い」にみる「助け合うコミュニティ」形成に関する研究」により検討した。



## 受け継がれる石

齋藤範明(生産工/卒業設計/現・千葉大学大学院) 指導/篠崎健一准教授



北木島と呼ばれる島が瀬戸内海に浮ぶ。島で採れる北木石は、日本銀行や大阪城桜門などの名建築に使われている。採石場跡は、高く大きな岩肌が聳え立ち、風の音を感じるほど静かで、湖のような水たまりが緑に囲まれる。

この産業遺産で感じる自然(水・光・風・空・緑)と呼応する石の空間を計画する。自然の美しさ、迫力ある風景を残し、採石場跡を縫うように設計する。人びとが集まる場所として、カフェ・多目的ホールを設け、他島や本島の人の交流を楽しむ。

島民は石を誇りに思い続け、島を訪れる人は島の魅力を発見する。体感する建築である。

## 聴衆の誕生 -音・楽の器-

小林拓也(工/卒業設計/現・日大大学院) 指導/浦部智義准教授

東日本大震災から3年。原発事故の影響もあり、福島県全体では人口の減少がみられる一方、県内随一の経済都市である郡山市では、復興需要やそれを足がかりにした情報関連企業、製造業者の進出もあり、人口の増加がみられる。それを新しい文化創出の契機ととらえ、福島県全体の文化レベルの底上げを促すことも含めた文化創造活動拠点として、音楽ホールを中心とした複合施設を計画した。

固定化されやすいホール空間には、可動式ルーバーによって光と音をフレキシブルに操作できる空間を付加することで、多様化する音楽需要に対応する可変性のある空間とした。また、県内の子どもたちの現状を鑑みた屋内運動場や、滞在型創造活動を支援する宿泊施設を複合し、人びとが楽しめる活動の相乗効果をねらった。建築空間に関しては、県外からも音楽・建築関係者を含め多くの人を訪れてくれるよう、斬新かつ力強い空間を目指し、建築の力で人と施設の距離が近くなることを目論んだ。

## トラス構造の形状とその地震応答性状に関する研究

栗原弘樹(工/卒業論文/現・レスコハウス) 齋藤征紀(同左/現・赤谷建築設計事務所)  
佐藤直人(同左/現・セコムエンジニアリング) 指導/倉田光春教授

本論文は、トラス構造の歴史をたどり、その成立と発展に寄与した人びとの知恵と知識を材料と施工、構造と形状そしてその理論をテーマごとにまとめ、問題点と課題を抽出し、それを検討したものである。抽出した問題点を(1)~(3)に、課題を(4)~(5)に示す。なお検討は、トラス構造の上弦、下弦材の形状と等分割法について行った。

(1)粘弾性梁基礎式と仮想仕事の原理の誘導。(2)トラス部材中間質量分布の影響を考慮したピン接合トラス部材行列振動方

程式の誘導。(3)上記で誘導したピン接合トラス部材の行列振動方程式を用いて、トラス構造の地震応答解析を行い、その動的変位応力性状を明らかにした。

(4)粘弾性梁部材行列振動方程式を用い、トラス節点での変位の連続条件を満足し、回転を非連続とする有限要素数値積分法により地震応答解析する。(5)粘弾性梁要素を動的縮小法によりピン接合トラス部材を誘導し、有限要素数値積分法により地震応答解析する。

## セメント系高密度材料のγ線遮蔽性能実験及び基礎的性質の検討

横山貴史(工/卒業論文/現・クレハ建設) 指導/サンジェイ・パリーク准教授

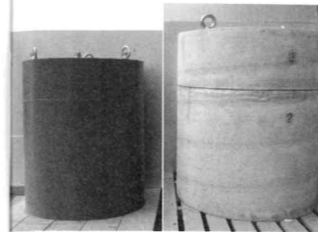
原発事故により飛散した<sup>134</sup>Csおよび<sup>137</sup>Csを多量に含む郡山市内の放射能汚染土を線源とし、さまざまな比重および板厚を有するセメント系複合材料遮蔽体のγ線遮蔽性能について比較・検討を行う。本研究では、コストおよび調合的にも実用性・汎用性が高い重量コンクリートを開発し、γ線遮蔽性能を実証する。

各遮蔽板の遮蔽効果の詳細として、重量コンで、板厚50mm遮蔽時における線量率が0.99 μSv/hで、遮蔽なしの場合の距離50mm線量率2.47 μSv/hに比較して

59.9%低減した(遮蔽された)。

また板厚150mmでは0.67 μSv/hから0.04 μSv/hまで低下し、遮蔽率は94.6%であった。比較用の普通コンでは、板厚50mmで遮蔽率は41.1%、150mmでも81.1%に留まった。重量コンクリートの遮蔽率は、普通コンと比較して1.17~1.46倍であり、今後の動向としてコンクリート壁厚の縮小化および軽量化が可能になることで、移動・保管時の遮蔽容器の活用および原子力発電所、病院などのγ線を用いる施設への活用が見込める。

放射性汚染物遮蔽容器  
左/高密度コンクリート  
密度4.57 kg/m<sup>3</sup> 壁厚100mm  
質量420kg  
右/普通コンクリート 密度2.14 kg/m<sup>3</sup> 壁厚200mm  
質量600kg



## オープンスペースを持つ小学校における家具の設えに関する研究

佐藤いちか(工/卒業論文/現・日大大学院) 守岡優里(同左/現・サンベース)  
指導/市岡綾子専任講師

本研究は、オープンスペースと普通教室との境界にカウンターを設置した小学校を事例対象とし、教諭と児童を対象としたアンケート調査と行動観察調査の結果から、オープンスペースでの活動を支える家具の役割や設えの状況を明らかにするものである。授業展開に応じてオープンスペースを使い分ける実態や児童の成長に応じたオープンスペースの役割を把握した。

低学年では、ソファの導入など授業の緊張感を和らげる空間づくりや、個別対応

を可能とする家具を充実させ、中学年では交流や団体活動を目的とする多様なイス座の場を提供していた。

高学年では必要最小限の家具に留め、カウンターや棚の天板上には、児童の気づきを促す情報を提供し、自主性を育む教員の工夫が確認された。造付家具のカウンターは作業面や収納、展示など多様な学習活動の場であると同時に児童が身を委ねて自由な姿勢をとる行動もみられ、安心・安全の拠りどころとしても機能している。

## 神社建築における造形と装飾手法に関する一考察 -近世福島県の事例を中心にして-

鈴木翔子(工/卒業論文/現・東日本ダイワ) 指導/大山亜紀子助教

元来、簡素な意匠と形式であった神社建築は、仏教建築の影響のもとに装飾が付加されていった。中世は千鳥破風などで本殿の正面性を強調した屋根の造形や、長押の上方に限定した暮股などの彫刻装飾が特徴で、桃山時代には入母屋造の本殿に拝殿を連結し、社殿全体に同種の装飾を施した豪華絢爛な霊廟建築が出現した。

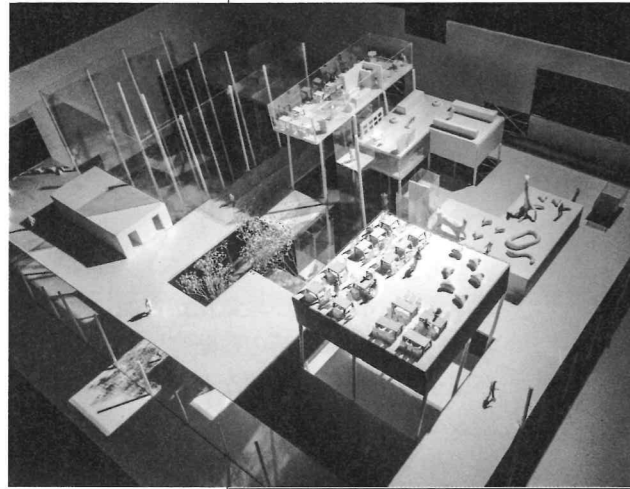
本研究ではこの流れを把握した上で、福島県における近世以降の神社建築7例(重文)の装飾手法について、外観の彫刻装飾の部位と屋根の造形に着目しながら分析を

試みた。

近世は流造の本殿に拝殿を連結した複合社殿が普及したため、正面から存在を確認できなくなった本殿に代わって、拝殿に千鳥破風を設けて本殿の入口と社殿の正面性を示した。

また、装飾を向拝に限定した簡素な拝殿と、全体(縁下・壁面)を彫刻装飾で覆った本殿との対比によって、神の鎮座する空間を外から認識できるような格式の表現と装飾の手法が形成されていった。

**PILLAR CHURCH** - 海浜幕張カトリック教会 -  
木村肇 (短大/卒業研究(設計)/現・日大理工学部建築学科) 指導/田所辰之助教授

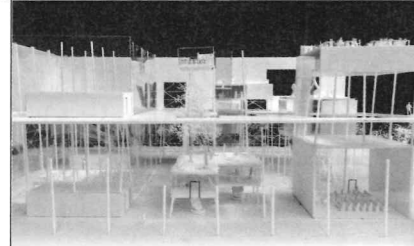


従兄弟の結婚式での神秘的な体験が今回のテーマを決めるきっかけだった。現代建築のひとつの傾向として、中心がなく、離散していて、平面的な建物というイメージがある (SANAA など)。

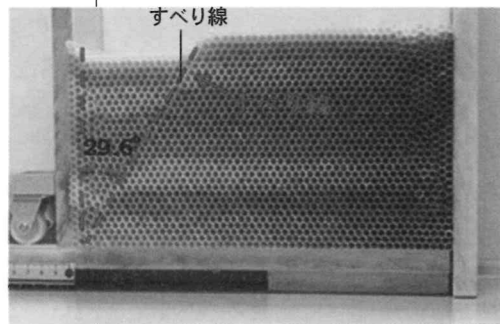
一方、教会の建築には中心が存在し、また垂直性が強調されている。このふたつを組み合わせると「平面的で中心がなく、垂直性をもった教会」という空間イメージが生まれる。このような一見矛盾した空間をつくり出すためにはどうすればよいか、この点が最大のテーマだった。

構成としては、1階に主聖堂、告解室、香部屋、泣き部屋、小聖堂を置いている。その他に12使徒への礼拝スペースを、3使徒を1組のユニットとして配置した。それぞれが離散的に配置されていることにより、建物のさまざまな場所で人びとは祈りを捧げることができる。

2階はコミュニティセンターとなっていて、教会に関連する図書館やアートギャラリー、レストランなどの機能が入っている。いずれもレベルを変えて配置されているため、高さの違う床面の間隙から、1階の祈りの広場を見通すことができる。



**擁壁に関する研究** - 主働崩壊形状観察実験 -  
太齋光 (短大/卒業研究(論文)/現・自営) 指導/佐藤秀人准教授



崩壊形状とすべり線

この研究は、モール・クーロンの破壊条件とランキンの土圧理論に関する理解を深め、地盤が主働崩壊する様子を考察することを目的として実施したものである。

擁壁を設計する際には、地盤が主働崩壊する時の土圧を設計外力のひとつとして用いるが、崩壊地盤の状態やすべり線の形状を理解することは重要な事項である。この時の応力状態は平面ひずみ状態となるので、アルミ棒積層体を用いた可視化実験は古くから行われているが、本研究ではアルミ棒の代わりに着色したストローを積層体として使用して崩壊形状の観察を試みた。

木製の板にテフロンシートを添付した模型擁壁を、ゆっくり主働方向に移動させてすべり線の発生状況を写真撮影によって観察した。擁壁下端から直線的に発生するすべり線を明確に観察することができ、すべり線角度から逆算した内部摩擦角は29.6度となり、円形粒子の摩擦角である30度に非常に近似した値となった。

# OKEN SEINEN-BU START

オウケンカイノワカガエリ



## 桜建会青年部発足

桜建会の新たな試みとして、昨年末若手メンバーを中心にした桜建会青年部が発足した。現在、日大理工学部駿河台キャンパス近くの建築設計事務所セカイ\*のオフィスにて、月1回のペースでメンバーが集まりワークショップを開催している。

青年部は、全員が理工・工・生産工・短期大学部を卒業した全員が日大卒のメンバーによる若手建築家ユニット。設計士、家具デザイナー、構造・設備士、教員、まちづくりプランナーなどで構成され、各自の専門を生かして、議題はさまざま、単独参加が難しいプロポーザルコンペに取り組んだり、新たな視点の勉強会などを実施する。今後は実際のプロジェクトや各分野の研究活動、学生との連携など、桜建会に関連する活動を準備中。これらを通して、ベテランや若手OB・OGとの交流を進め、卒業してからの日大との新しい関わり方をつくっていく。

ワークショップは誰でも参加歓迎。下記のフェイスブックページに情報を随時アップしているので、興味のある方はご連絡ください。

\*建築設計事務所セカイとは  
日大理工学部建築学科卒業の横井創太・小野志門・北川健太の3人による若手建築家ユニット。桜建会青年部代表は北川が務める。

## Facebook

<http://facebook.com/oken.seinenbu>

セカイ TEL/FAX 03-5577-5570

E-mail [contact@sekai-arch.com](mailto:contact@sekai-arch.com)



最近の  
ワークショップ  
テーマ  
卒業してからの  
大学との  
関わり方を探る

建築設計事務所  
を立ち上げる!?

プロポーザル  
コンペに参加  
する!?

学内の建物や  
プロダクトの  
デザインを  
する!?

研究懇談会に  
参加する!?

コンペを開催  
する!?

最新建築物の  
担当者を招いて  
トークショーを  
やる!?

メンバーが登  
壇する授業を  
つくる!?

etc.....

## 事務局だより

### 平成 26 年度 桜門建築会総会報告

平成 26 年度総会は、本年 5 月 28 日(水)、東京御茶ノ水の「東京ガーデンパレス」にて行われ、出席者は 106 名であった。

はじめに岩井光男会長のあいさつがあり、次いで各委員会からの報告、日本建築学会の選挙報告、監査報告

が行われた。続いて平成 26 年度の事業計画が提出され、審議された。また総務委員会から本年度役員案が提出され審議された。これらは拍手をもって承認された。

総会終了後は、懇親会が開かれ、盛会に終わった。

### 今年も桜門建築会主催の 学生設計コンペティションを 開催

今年のコンペティションは日大卒の若手建築家、小川博央氏(建築家)、菅原大輔氏(建築家・アートディレクター)、鍋島千恵氏(建築家/TNA)を審査員に迎える。

課題のテーマは「<sup>かいだ</sup>間の家」。7 月 16 日(水)に理工学部駿河台校舎で、

出題を兼ねた公開レクチャーが開催された。

第一次審査のための提出期限は、9 月 30 日(火)。一次審査を通過した人たちの第二次公開審査は、11 月 22 日(土)に理工学部駿河台キャンパス 1 号館の CST ホールで 15 時から始まる。

### 「NU アート倶楽部」の 第 2 回アート展を開催

会員相互の親睦をはかるために設立した「NU アート倶楽部」(略称 NAC)の第 2 回アート展を、本年 10 月 20 日(月)～25 日(土)まで、

理工学部駿河台キャンパス 1 号館 4 階の CST ギャラリーで開催する。開催時間は 12 時～18 時(最終日の 25 日は 15 時まで)。

### 新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務 (平成26年2月11日～6月5日) 8 名

金森 勇樹	理工建 -H2	東日本旅客鉄道(株)	下村 修一	理工建 -H13	日本大学生産工学部
菅 雅幸	生産院 -59	日本文理大学	神田 順	他大学 -45	日本大学特任教授
本 耕一	理工建 -54	森ビル(株)	池本 明正	生産工 -51	清水建設(株)
古澤 大輔	他大学 -H12	日本大学理工学部	金田 勝徳	理工建 -43	(株)構造計画プラス・ワン

桜建会報 NO.100 2014-July  
 発行人 岩井光男  
 編集 桜門建築会広報委員会  
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14  
 日本大学理工学部内

広報委員会  
 委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)  
 副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)  
 大川三雄(理工学部建築学科)  
 委員 山本和清(理工学部海洋建築工学科)  
 亀井靖子(生産工学部建築工学科)  
 プンタラ・S・ガン(工学部建築学科)  
 矢代眞己(短期大学部建築・生活デザイン学科)  
 北川健太(セカイ/青年部代表)  
 大西正紀(mosaki)  
 西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局  
 住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。  
 理工学部5号館7階574A号室  
 TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216  
 E-mail kaiin@okenkai.jp  
 ホームページ <http://www.okenkai.jp/>  
 専任/星野麻衣子  
 非常勤/櫻井佐和、大木明子  
 業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

## 学部ニュース

### 生産工 トピックス

◎4月1日付で、建築工学科主任に小松博教授、専攻主任に塩川博義教授が就任し、水野僚子助手(専門/近代日本建築史)が新たに着任した。

◎前生産工学部長の松井勇教授が4月8日をもって退職された。長い間ありがとうございました。その後、日本大学本部は松井勇先生に対し名誉教授の称号を授与した。

◎2013年度日本建築学会関東支部研究発表会で、長崎透君(藤本研 M2)が若手優秀研究報告賞を受賞。また、論文「長方形鋼管および CFT 部材の圧縮特性(長崎透、荒井望(共に藤本研 M2)、藤本利昭)」、「塗料の水接触角とよごれに関する研究(野地貴史(14年卒)、松井勇、永井香織)」が「優秀研究報告集」に掲載されることになった。

◎泉幸甫研究所教授(本学部卒)が校長、根来宏典氏(本学部卒)が代表理事、高野保光氏(本学部卒)が副代表理事を務めている『「家づくり学校」-社会にコミットする設計者を養成する教育プログラム、その実践と継続的取り組み』が、2014年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞した。

◎田村裕希氏(本学部卒・東京藝術大学教育研究助手)が松岡聡氏(近畿大学准教授)と共同で著した「『配置図集』を用いた初学者向け建築設計教育プログラムの実践と展開」が2014年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞した。

◎A studio 主宰の内村綾乃非常勤講師(本学部卒)が日本女子大学教授の篠原聡子氏(空間研究所主宰)と共同で設計した「SHARE yaraicho」で、2014年日本建築学会賞(作品)を受賞した。

◎神田亮教授が「空気流体振動現象を対象としたリアルタイムハイブリッド式実験法とその応用」で平成 25 年度日本機械学会論文賞を受賞した。

### 工 トピックス

◎4月1日付で、倉田光春教授と若井正一教授が退職された。

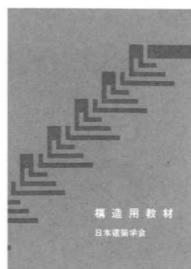
◎4月1日付で、鈴木晃教授、渡部和生特任教授、山岸吉弘助教が新任された。

### 理工 建築学科トピックス

◎4月1日付で、新しく建築学科のメンバーになったのは、田所辰之助教授(短期大学部からの異動)、栢田吉弘特任教授、宮田敦典助手である。また、田嶋和樹助教、冨田隆太助教が准教授に、石鍋雄一郎助手が助教に昇格、横河健教授が新たに特任教授として建築学科所属となり、廣石秀造助手が短期大学部に異動した。

◎金田勝徳特任教授、末岡佐江子助手、西脇梓助手が3月31日をもって退職された。

◎安達俊夫教授、岡田章教授、宮里直也准教授、秦一平准教授、廣石秀造短大助手が執筆として参加した『構造用教材』が刊行された。大学・高等専門学校などの「教材」として、各種構造の形式、全貌図、各部詳細図などを章ごとに分けて解説し、構造を総合的に理解できる一冊となっている。第2章地盤・基礎を安達教授が、第9章シェル・空間構造を岡田教授、宮里准教授、廣石短大助手が、第10章免震・制震構造を岡田教授、秦准教授が執筆した。



『構造用教材』(日本建築学会編 A4版 2160円 発行/丸善出版)

### 理工 海洋建築工学科トピックス

◎新宮清志名誉教授は計算工学の学術的発展への貢献と日本計算工学会運営への貢献と功勞により、5月に日本計算工学会賞(業績賞)を授与された。  
 ◎海洋建築工学専攻の OB 本間俊雄(博士後期課程、86年修了)鹿兒島大学教授は、「構造形態の解析と創生に関する一連の研究」に対し、2014年日本建築学会賞(論文)を受賞した。

### 短大 トピックス

◎4月1日付で、羽入敏樹短大教授が、学科長に就任した。

◎小石川正男短大教授、黒木二三夫短大教授が、3月31日をもって退職された。長い間、ありがとうございました。また田所辰之助短大教授は4月1日付で理工学部建築学科に異動した。

◎4月1日付で、矢代眞己短大准教授は短大教授に、酒匂教明短大専任講師は短大准教授に、星和磨短大助手は短大助教に、昇格した。そして、高安重一短大助教、廣石秀造短大助手を、新たに教室メンバーに迎えた。

◎羽入敏樹短大教授が、日本音響学会の平成 26 年「環境音響研究賞」を受賞した。同賞は、環境音響学の発展に貢献した、主として建築音響分野または騒音分野に関連する一連の研究を行った研究者に授与される。受賞対象は「室内音場の方向情報の主観評価と音場拡散の枠組みに関する研究」で、コンサートホールや劇場などの建築音響設計の発展に寄与する研究成果として評価された。



## トピックス

◎日本免震構造協会創立 20 周年記念学生アイデアコンペ「免震・制振はもう古い??～生き延びる建築・街づくり」で金子拓也君、大滝優人君、杉窪宏哉君、叶錦春君(ともに藤本研卒研生、応募当時ゼミ生)の作品「HASHIRA HOUSE」が佳作に入選した。



## 理工学部建築学科、海洋建築工学科、短期大学部の教員が関わった構造設計の書籍『建築形態と力学的感性』を発行

本年 3 月に、理工学部海洋建築工学科の新宮清志名誉教授、建築学科の岡田章教授、短大の廣石秀造助手が参加する書籍『建築形態と力学的感性』が刊行された。

骨組の力学を越えた建築物の構造設計における考え方について、設計者自らによる解説とともに、最近の構造力学トピックス、構造設計能力向上のための自習方法などを取り上げている。書籍の出版にともない、シンポジウ

ム「建築のかたちと力学的感性 - 事例に学ぶデザインアプローチ」が、3月 17 日に建築会館ホールで開催された。



『建築形態と力学的感性』(日本建築学会編 A4 版 4800 円 発行/丸善出版)



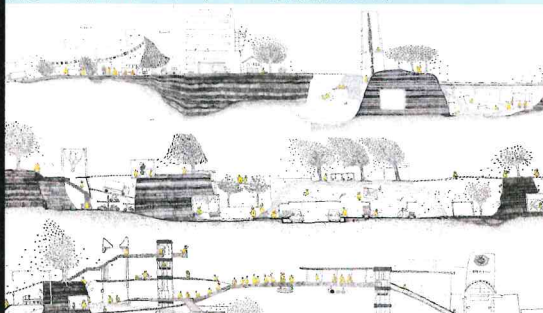
## 建築学科トピックス

◎小笠舞穂さん(佐藤慎也研 M1)の卒業設計「在り触れる美術館」が、「第 37 回学生設計優秀作品展(レモン展)」(主催/学生設計優秀作品展組織委員会、レモン画翠)において、審査委員長である坂本一成氏の選出による審査員個人賞「坂本一成賞」と、10 点を選出する「レモン賞」を同時受賞した。また、「第 23 回東京都学生卒業設計コンクール 2014」(主催/日本建築家協会・関東甲信越支部)で「銀賞」を受賞。東京都内大学の代表作品 51 点が審査され、全国大会への出展作にも選

ばれた。その他、「赤レンガ卒業設計展 2014」(主催/赤レンガ卒業設計展 2014 実行委員会)では 230 点以上の作品から「10 選」に選ばれた。

◎佐藤達弥君(佐藤光彦研 M1)の卒業設計「吉祥寺ヘテロトピア」が、「せんだいデザインリーグ 2014 卒業設計日本一決定戦」(主催/仙台建築都市学生会議、せんだいメディアテーク)において、500 点以上の作品から「ファイナリスト 10 選」に選ばれた。また、「赤レンガ卒業設計展 2014」において、「10 選」に選ばれた。

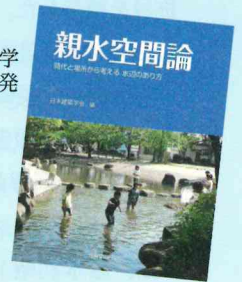
左/「吉祥寺ヘテロトピア」の模型。下/「在り触れる美術館」の断面スケッチ (P15 に作品紹介あり)



## 海洋建築工学科トピックス

◎畔柳昭雄教授、坪井壘太郎准教授が著者として参加した書籍『親水空間論 - 時代と場所から考える水辺のあり方 -』が刊行された。本書は「親水」の用語を冠する公園が誕生した 1970 年代から直近の 2010 年代までの親水の歴史を時代軸で概観し、さらに「海」「河川」「湖沼/池」「堀割/運河」「用水」のそれぞれの場所における親水の事例をもとに、水辺と都市のあり方について論究している。

『親水空間論』(日本建築学会編 B5 版 3456 円 発行/技法堂)



## トピックス

◎羽入敏樹短大教授と星和磨短大助教は、騒音制御学会の平成 25 年度「環境デザイン賞」を大林組と共同受賞した。同賞は都市や住空間等の音・振動環境の快適性向上のための研究や技術開発で優れた業績をあげた法人、グループまたは個人を顕彰する。対象の研究は羽入・星研究室が技術協力して大林組が開発した「工事騒音モニタリングシステム「音ジャッジ」」である。なお、大林組の開発担当者は建築学科 1988 年卒の池上雅之氏。「音ジャッジ」は工事現場で発生するさまざまな騒音の音源を突き止め、騒音監視をより確実に行うためのシステムである。音の到来方向と大きさをリアルタイムに判別できる羽入・星研究室が開発した「C-C マイク」を応用して実現した。

下左/「音ジャッジ」の監視用センサー。下右/方向判別する C-C マイク (写真は大林組 HP より)

